

『萬葉集』の諸相 (四) — (七)

—— 表現と表記 —— 承前<sup>(1)</sup>

四・音<sup>ね</sup>のみし泣かゆ

唯もう泣けてならない、声に出して泣いてしまふ、という「音<sup>ね</sup>のみし泣かゆ」なる簡潔優雅な面白い表現が、一つの決まり文句のようになって『萬葉集』では十六回使われる。その他「哭泣く」「音に「を」泣く」など変形の関連表現が二十五回みられる。この同種の合計四十一例を、順に全て列挙してみよう。

3	2	卷
三〇一	一五五	歌番号
哭には泣くとも	泣のみし泣かゆ	原文
A	B	型
岩が根のこごしき山を越えかねて音には泣くとも色に	れば心ぞ痛き…… ふ聞けば音のみし泣かゆ語	作品
	泣のみし泣きつつ	原文
	一五五	歌番号
	二二〇	卷

森田 孟

4						
四九八	四八三	四八一	四五八	四五六	三二四	
哭にさへ鳴 きし	啼のみや鳴 かむ	啼のみ哭き つつ	哭のみそ吾 が泣く	哭のみし泣 かゆ	哭のみし泣 かゆ	
E	D	C	A	A	A	
泣きし への人そまさりて音にさへ 泣きし	今このみのわざにはあらず古 なみ 子に今また更に逢ふよしを	負ひみ抱きみ朝鳥の音のみ 泣きつつ恋ふれども…… 朝鳥の音のみや泣かむ吾妹	なしにして 朝夕に音のみそ吾が泣く君 みどり子の這ひたもとほり	して 鶴の音のみし泣かゆ朝夕に	思へば 君に恋ひいたもすべなみ葦	出でめやも 夕霧にかはづは騒く見る ごとに音のみし泣かゆ古へ

	5					
八九八	八九七	六四五	六一九	六一四	五一五	五〇九
祢能尾志奈 可由	祢能尾志奈 可由	哭のみし泣 かゆ	哭のみ泣き つつ	哭のみし泣 かも	哭のみしそ 泣く	哭のみし哭 かゆ
G	G	A	A	A	A	F
き行く鳥の音のみし泣かゆ	慰むる心はなしに雲隠り鳴 し泣かゆ	白栲の袖別るべき日を近み 心にむせひ音のみし泣かゆ	使ひを待ちやかねてむ み泣きつつたもとほり君が	相思はぬ人をやもとな白栲 の袖潰つまでに音のみし泣 かも	ひとり寝て絶えにし紐をゆ ゆしみとせむすべ知らに音 のみしそ泣く	明け闇の朝霧ごもり鳴く 鶴の音のみし泣かゆ吾が恋 ゆる千重の一重も……

	11				9
	二六〇四	一八一〇	一八〇九	一八〇四	一七八〇
	哭には泣くとも	哭のみし泣かゆ	哭泣きつるかも	啼のみ鳴きつつ	泣のみや哭かむ
	A	A	A	D	B
	念ひ出でて音には泣くとも いちしろく人の知るべく嘆 かすなゆめ	葦屋の菟原処女の奥つ城を 行き来と見れば音のみし泣 かゆ	造り置ける故縁聞きて知 らねども新喪のごとも音泣 きつるかも	葦垣の思ひ乱れて春鳥の 音のみ泣きつつあぢさはふ 夜昼知らず…	…恋ひかも居らむ足ずりし 音のみや泣かむ海上のその 津を指して君が漕ぎ行かば …い立ち嘆かひある人は音 にも泣きつつ語り継ぎ偲ひ 継ぎ来る処女らが…

		14		13	12
三四七一	三四五八	三三六二 或る本	三三六二	三三二一四	三三二一八
安乎祢思奈	安乎祢思奈 久与	安乎祢思奈 久流	吾乎祢之奈 久奈	哭のみし泣 かゆ	哭のみそ吾 が泣く
G	G	G	G	A	A
しまらくは寝つつもあらむ 息づくまでに	汝背の子やとりのをかちし なかだをれ我を音し泣くよ	武蔵嶺の小峰見隠し忘れ行 く君が名かけて我を音し泣 くる	相模嶺の小峰見そくし忘れ 来る妹が名呼びて吾を音し 泣くな	こ思ふに心し痛し… …死なむと思へども道の知 らねばひとり居て君に恋ふ るに音のみし泣かゆ	朝な朝な筑紫の方を出て見 つつ音のみそ吾が泣くいた もすべなみ

17				15	
四〇〇八	三七七七	三七六八	三七三二	三六二七	三四八五
祢能未之奈 可 由	祢能未之曾 奈久	祢能未之曾 奈久	祢能未之奈 可 由	祢能未之奈 可 由	哭乎曾奈伎 都流
G	G	G	G	G	H
とぎす音のみし泣かゆ朝霧	みしそ泣く すべのたどきを知らに音の みしそ泣く	昨日今日君に逢はずてする べもなき恋のみしつづ音の みしそ泣く	このころは君をおもふとす べもなき恋のみしつづ音の し泣かゆ	より浦磯を見つづ泣く子な す音のみし泣かゆ… あかねさす昼は物思ひぬば たまの夜はすがらに音のみ し泣かゆ	を夢のみにもとな見えつつ 我を音し泣くる 剣太刀身に添ふ妹を取り見 がね音をそ泣きつる手兎に あらなくに

		20		19	
	四五一〇	四四八〇	四四七九	四四三七	四二一五
	祢能未之奈 加由	祢能未之奈 加由	祢能未之奈 気婆	安乎祢之奈 久母	哭のみし泣 かゆ
	G	G	G	G	A
泣かゆ	の野辺見るとに音のみし	ば音のみし泣かゆ朝夕にして 大君の継ぎて見すらし高円	ひかねつも 朝夕に音のみし泣けば焼き 大刀の刀其己呂も我はおも	ほととぎすなほも鳴かなむ 本つ人かけつつもとな我を 音し泣くも	遠音にも君が嘆くと聞きつ れば音のみし泣かゆ相念ふ 吾は
					の乱るる許己呂…

右の表の「型」は、名詞「音」と動詞「泣く」が原文でどのような組み合わせで表記されているか、名詞―動詞の原字を示したものの記号で、それは出現順に次のようになっていいる。括弧内はその数である。

A、哭―泣(16)。B、泣―哭(2)。C、啼―哭(3)。D、啼―鳴(2)。E、哭―鳴(1)。F、哭―哭(1)。G、字音仮名表記方式の、祢―奈く(15)。H、同じく、哭―奈く(1)。

Aの「哭―泣」が大半であり、字音仮名表記方式ではGの「祢―奈」が殆どである。

ここで使用される「啼」は、鳥が「なく」以外は⑨―一八〇一の、塚に立ち寄って哀れな乙女を思つて旅人がおいおいと嘆き「泣く」のだが、ここにも塚で鳴く鳥のイメージが連想されて重なつていそうだ。

原字を見ていると、「なく」ことを「なく」かのようで、何だか既に見た前回の二、の同族目的語法が想起されよう。この表に挙げた作品はいずれもそれぞれ優れていると筆者には感じられるが、この表現の効果も与つていそうだ。一首一首詳しく味読鑑賞してみたいが、それは機を改めたい。ここでもう一つ、類似の表現を挙げておきたい。

●筑波嶺にかか鳴く鶯の音のみをか(祢乃未乎可)泣ぎ〔奈伎〕渡りなむ逢ふとはなしに(⑭三三九〇)〔G〕。表中に入れてもよかつたのだが、「音」と「泣」とが微妙に途切れているので別にした。鶯の実景と作者の恋情とを重層させた秀作。

尚、右の表の中の④六一四の\*は、「泣くも」の異訓があること、⑮三七三二、同三七六八の\*は底本が校訂されていることを示す。

## 五. ねもころ

現在では些か古風な感じになってきた語彙の「懇ろ」だが、その古形である上代語の「ねもころ」、及びそれに「ころ」を重ねて強めた「ねもころころ」が、「に」「の」を伴った形共々『萬葉集』では十五とおりの表記で合計二十九回使われる。その表記を出現順に記号を付してまず挙げれば(各々の括弧内はその使用例数)

A、歎(10)。B、根毛許呂尔(1)。C、叩々(1)。D、根毛居侶(1)。E、惻隠(4)。F、根母己呂亦(1)。G、心哀(2)。H、惻隠々々(1)。I、歎懇

(1)。J、慇懃(2)。K、根毛一伏三向凝呂尔(1)。L、  
 祢毛己呂尔(1)。M、祢毛許呂尔(1)。N、根毛己呂尔  
 (1)。O、祢母許呂其呂尔(1)。  
 「菅の根の」を枕詞として「根」の音から「ねもころ」  
 を導いて(解)、菅の根のように「ねもころ」と続くもの  
 が十三回、「菅のねもころ」と「菅の」に続くものが二回  
 である。全てを順に表にしてみよう。

巻	2	4
歌番号	二〇七	五八〇
原字	懃	懃
記号	A	A
作品	天飛ぶや軽の道は吾妹子 が里にしあればねもころ に見まく欲しけど……	あしひきの山に生ひたる 菅の根のねもころ見まく 欲しき君かも おしてる難波の菅のねも ころに君が聞こして年深 く長くし言へば…… 念ふらむ人にあらなくに

11	9	8	7		
二三九三	一七二三	一六二九	一三二四	七九一	七四〇
惻隱	根毛居侶	叩き	懃	懃	懃
E	D	C	A	A	A
玉梓の道行かずしあらば	ぬ川かも 楊のねもころ見れど飽か	ねもころに物を念へば言 はむすべせむすべもなし 妹と吾と手携さはりて……	葦の根のねもころ念ひて 結びてし玉の緒といはば 人解かめやも	奥山の岩陰に生ふる菅の 根のねもころ吾も相念は ざれや	ねもころに情尽くして恋 ふる吾かも 言のみを後も逢はむとね もころに吾を頼めて逢は ざらむかも

二七五八	二五二五	二四八八	二四八六 或る本	二四七三	二四七二	
勲	勲	心哀	根母己呂尔	惻隱	惻隱	
A	A	G	F	E	E	
えぬかも ふるにしますらを心念ほ	昔の根のねもころ妹に恋 ふるにしますらを心念ほ	ねもころに片念すれかこ のころの吾が情利の生け るともなき	ねもころに念ひそめけむ ねもころになにしか深め 磯の上に立てるむろの木	人あらじ 千沼の海の潮干の小松ね もころに恋ひや渡らむ人 の兒故に	あはざらましを 見渡しの三室の山の巖昔 ねもころ吾は片念そする	ねもころのかかる恋には

三一三〇	三一〇九	三〇五四	三〇五三	三〇五一	二八六三	12 二八五七
心哀	愍勲	勲懇	勲	勲	惻隱	惻隱々々*
G	J	I	A	A	E	H
豊国の企救の浜松ねもこ ろかも	ねもころに憶ふ吾妹を人 言の繁きによりて淀むこ ろかも	吾が念へるらむ 昔の根のねもころごろに 相念はずあるものをかも	あしひきの山昔の根のね もころに止まず念はば妹 に逢はむかも	あしひきの山昔の根のね もころに吾はそ恋ふる君 が姿に	浅葉野に立ち袖さぶる昔 の根のねもころ誰が故吾 が恋ひなくに	菅の根のねもころごろに 照る日にも乾めや吾が袖 妹に逢はずして

	18	17	14	13	
	四一一六	四〇一一	三四一〇	三二八四	
	根毛己呂尔	柀毛許呂尔	柀毛己呂尔	根毛一伏三 向凝呂尔	
	N	M	L	J	K
	大君の…鶴が鳴く奈呉江の菅のねもころにおもひ結ばれ嘆きつつ…	大君の…来なむ我が背子ねもころにな孤悲そよとそいまに告げつる	伊香保ろの沿ひの榛原ねもころに奥をなかねそまさかし良かば	み吉野の真木立つ山に青く生ふる山菅の根のねもころに吾が念ふ君は…	菅の根のねもころに吾が念へる妹によりては言の忌みもなくあり…
	ろになにしか妹に相言ひそめけむ				

20	四四五四	柀母許呂其	O	高山の巖に生ふる菅の根のねもころに振り置く白雪
		呂尔		

⑫二八五七の\*。この表記が底本だが(小)は尼崎本などの「々々」がない形を原形と認めて「惻隠」を表記とするので、その場合はHは無くなりEが五回になる——ということは、「惻隠」は「ねもころ」とも「ねもころごころ」とも訓ませることになり、表記も十四とおりになる。

Cの「叩々」には、陳の徐陵編『玉台新詠』(『文選』と並ぶ六朝の二大詞華集)の「卷一所収、梁の繁欽「定情詩」の「何以致区区、耳中双明珠。何以致叩叩、香囊繫肘後」に拠るものだろう」という感銘深い指摘が、浩瀚な画期的名著として誉れ高い芳賀紀雄『萬葉集における中國文學の受容』(塙書房、二〇〇三)になされている(同書P・二二七)。

Kの「根毛一伏三向凝呂尔」の「一伏三向」を「ころ」と訓ませるのも驚きである。集中これに関連のある「戯書」に次の四例がある。



● 梓弓末の中ごろ〔末中一伏三起〕淀めりし君には逢ひぬ嘆きは止まむ(⑫二九八八)

● 春霞たなびく今日の夕月夜〔暮三伏一向夜〕清く照るらむ高松の野に(⑩一八七四)

● 真葛延ふ春日の山は…もののふの八十伴の男は 雁がねの〔折木四哭之〕来継ぐこのころ…(⑥九四八)

● さ雄鹿の妻問ふ時に月を良み雁が音〔切木四之泣〕聞こゆ今し来らしも(⑩二二二二)

長歌の「折木四」は「北村節信『喜多村筠庭節信』萬葉集折木四考(一八二四)」によつて初めて明らかにされた訓であり、⑩一八七四の「三伏一向」の「用字の解は『箋註和名抄』にあ」と示した上で、窪田空穂『萬葉集評釋』はこれらの訓を詳説する。引用そのままに近く要約しておこう。

西域から中国經由で渡来した樗蒲(後世の賭博の別名)という遊戯の具の采を我が国では「かり」と呼んでおり、その采が小さい折木の四片であったので、「折木四」あるいは「切木四」と書いて「かり」と訓ませた。その采は杏仁を薄く削いだような物で、表裏を白と黒で塗り潰し、白いほうの二つに雉が、黒いほうの二つに犢が描いてあり、それを投げて模様の出工合で勝負を決した。⑩一八七四の

「三伏一向」は、当時行なわれた柶戯と称する遊戯の語で、一面は黒く他面は白く塗った四本の木片を投げ、その三本が伏(裏、下向き)、一本が向(表、上向き)の場合を「つく」と称したのでそれを借りて戯訓とし、反対に「一伏三向〔起、も同じ〕」の時は「ころ」と称したのでそれを「ころ」の訓みにした、のであると。

戯書といえばあまりにも有名な集中屈指の表記がみられる次の一首は、思い返すたびに心が躍ろう。

● たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか〔馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿〕妹に逢はずして(⑫二九九二)

この原文の「馬声」は「い」、「蜂音」は「ぶ」、「石花」は海産小動物の「せ」、「蜘蛛」は虫のクモ、「荒鹿」はあばれる鹿。「母に家に閉じ込められて恋人に逢えない」「いぶせし」という気持を、それらの動物が心の中で騒ぐという表現で象徴している(解)。

表記によつて作品の内容を、その漢字の意味や喚起する映像で深く豊かに膨らませる注目すべき技巧を、萬葉びとは開拓していたのである。当時は「犬を呼び寄せるのに、馬を追うのに」と言った(小)その擬声語も表記に借用されて、「喚犬」及びその簡略化の「犬」で「ま」を、「追

馬」と同じく「馬」だけで「そ」を表記した作品もある。

● かけまくも…春の日暮らし まそ〔喚犬追馬〕鏡みれども飽かねば…(⑬三三二四)

● 音のみを聞きてや恋ひむまそ〔犬馬〕鏡直目に逢ひて恋ひまくもいたく(⑪二八一〇)

他に ● まそ〔犬馬〕鏡見飽かぬ妹に…(⑫二九八〇)

／ ● 祝らが齋ふ三諸のまそ〔犬馬〕鏡…(⑫二九八一)／

● …吾は渡らむ まそ〔犬馬〕鏡…(⑬三三二五〇)の三回、「犬馬鏡」の例がある。

● 宮材引く泉の柚〔追馬喚犬〕に立つ民の休む時なく恋ひ渡るかも(⑪二六四五)

「ねもころ」の表記の一つKにみられた戯書は、こうして集中の他の戯書にも思いを誘い込む。表記の違いによって同一の語の意味も微妙に変容することは言うまでもない。

## 六．忘れて念ふ——撞着語法

古くはホラーティウスの「不和の調和・乱調の階音 cordia discors」が有名だが、「残酷な親切」「公然の秘密」

「生きながらの死」など、意味の矛盾する二語(句)を並べて言い回しに効果を与える修辭法を、英語では「鋭い」と「鈍い」の合体したギリシャ語由来で「オクシモロン」(oxymoron<sup>(3)</sup>)と呼ぶ。

朝起きてからゆつたり構えて食事や化粧などに時間を費した拳句、外に飛び出すやタクシーを捕まえて、運転手さん早く早く、と急かしたりする。そういう人のことを沖繩言葉では「ヨンナアワテンヤ」と呼ぶそうだ。沖繩の人々の言う「本土」の共通語では「ゆつくりあわてん坊」。彼の地には優雅で至妙な言葉や表現が少なくないが、これなど正に言いも言ったり、これ以上に先刻のような人物をびつたり温和に表現する術はないだろう。「ゆつくりする」と「あわてる」の言わば反意語を一語に凝縮させた見事な「撞着語法」である。

「忘れて思う」なる表現が『萬葉集』には「忘れて念へや」の形で七回、「忘れて念はむ」で一回、出現する。忘れれば思わないし、思っていれば忘れていないわけ、「忘れる」と「思う」とは反対方向の語である。これは「撞着語(法)」だ。ところが、「忘れて思ふは忘れてしまつて思わなくなること」(小)であれば、これは当り前の

ことで、一瞬がっかりすると同時に、ずい分以前のことがあったが、江戸時代初期に書かれた安楽庵策伝編著者の咄本『醒睡笑』の存在を知った時のことを思い出した。

「醒める」と「睡る」とは反対の現象である。醒めて睡っている笑い、これは正しく撞着語だと大いに喜んで早速手にしたところ何のことはない、表題は「睡りを醒まして笑う」の意だとある。それなら撞着でも何でもない、そうか漢語はひっくり返して読むのか、とがっかりして一旦は放り出したが、内容は確かに実に面白い。その後、鈴木棠三校注の岩波文庫版が出たので大いに楽しんだが、思うにあの表題は、「睡りを醒ます笑い」と受け取るべきではないか、いや、あの笑いは、睡っているのは固<sup>ま</sup>りだが単に醒めているだけの笑いではない、醒めながら睡っている、睡りながら醒めている、要するに「醒睡」の笑いの集成なのであり、「醒睡」の状態でこそ一段と味読できる笑いではないか。やはりタイトルは撞着語だと、今は密かに思っている。

「忘れて念ふ」も、やはり、忘れて、しかも思うのである。「忘れてしまつて思わなくなる」となる程の、忘れてしまえばこんなに思い苦しむこともなくなる程の、忘

れてしまったほうがどれ程楽だか分らない程の、それ程に深く思い、愛することなのである。

● 大伴の三津の浜なる忘れ貝家なる妹<sup>いも</sup>を忘れて念へや

(①六八) (以後、該当箇所をゴチック体にする)

海浜に打ち寄せられた身無しとなつた貝殻は所持していると辛い物思いを忘れさせてくれるというのだから、あの浜にある「忘れ貝」よ、家にいる妻を「忘れて念へ」というのか、そういう状態になれたらどれ程心が安まるかも知れないからそうなりたいのは山々ながら、そうはなれないから辛い、というのである。

● 夏野行く小鹿<sup>こ</sup>の角の束の間も妹が心を忘れて念へや

(④五〇二)

あの小鹿の角のように短い束の間も愛しい妻を「忘れて念へ」といわれるのか、そうなれるならいいのにとてもそうはなれず、ひたすら思い焦れて苦しい、というのだ。

● 思ひ依り見依りて物は有るものを一日の間も忘れて念

へや (①一四〇四)

● あらたまの年は果つれどしきたへの袖交へし児を忘れて念へや (①一四一〇)

● 妹が袖別れて久<sup>ひさ</sup>になりぬれど一日も妹を忘れて於<sup>お</sup>毛倍

也や (15)三六〇四)

●越この海うみの信濃しんのうの浜はまを行いき暮くらし長ながき春はる日ひも忘わすれて於お毛も倍ばい也や (17)四〇二〇)

●垂たなひめ姫ひめの浦うらを漕こぐ舟ふね梶かぢ間まにも奈良なの我家わがやを忘わすれて於お毛も倍ばい也や (18)四〇四八)

以上七首、いずれも「忘れて念へ」というのか、確かにそういう状態になればいいしなりたいののに、とてもそうはなれないという強烈な愛情の表白である。

●須磨すまの海人あまの塩焼しほやきき衣きぬのなれなばか一日いちにちも君きみを忘わすれて念ねんはむ (6)九四七)

塩焼しほやきく時の作業衣さぎぬが着な古ふるされて萎なれて身みに馴なれてしまいうように互たがひいに馴染なじみ打ちとけるようになれば、君きみを「忘れて念ねんう」ようになるだろうからそうすればこんな切きなく苦くるしい思おもいをしなくてすむだろう、早くそうなりたいたいという思おもいの表明ひょうめいである。

「忘れて思う」という深い安心あんしんできる愛情あいじやうになりきれればもう苦くるしまなくてすむ、というそういう思おもいを思う、というのがこの撞つ着ちやく語ごの妙せうであろう。

●人目ひとめ多おほみ逢あはなくのみそ情こころみさえ妹いもうとを忘わすれて吾あが念ねんはなくに (4)七七〇)

人目が多かつたからこそであつて情でまであなたを忘れてしまつて思わなかつたのではない、という通常の「忘れてしまつて思わない」である。「吾が」が中に浸入しんじゆしてしまつとそうなる。集中しゆしゆ、「忘れる」と「念う」が対たいで一首に使つかわれている作品さくひんを挙あげておこつう。

●あをによし奈良なの家やには万代よろづよに吾われも通とほはむ忘わすると念ねんふな (1)八〇)

●吾わが命いのちの全まけむ限かぎり忘わすれめやいや日ひに異ひには念ねんひ増ますとも (4)五九五)

●葦あし辺べより満みち来きる潮うしほのいや増ましに念ねんへか君きみが忘わすれかねつる (4)六一七)

●心こころには忘わすれる日ひなく念ねんへども人ひとの言ことこそ繁しげき君きみにあれし念ねんへば (4)七〇二)

●ぬばたまのその夜の月夜つきよ今日けふまでに吾われは忘わすれず間まなく淡路島門渡あわじしまかどる船ふねの梶かぢ間まにも吾われは忘わすれず家やをしそ於お毛も布ふ

●外そとのみに見みればありしを今日けふ見ては年としに忘わすれず念ねんほえむかも (17)三八九四)

●笹ささの葉はにはだれ降ふり覆おほひ消きなばかも忘わすれむと言いへばま

して念ほゆ (⑩二二三七)

●白玉を手に巻きしより忘れじと念ひしことはなにか終らむ (⑪二四四七)

●高山の峰行くししの友を多み袖振らず来ぬ忘ると念ふな (⑫二四九三)

以上全て字音仮名表記は別にして「忘れる」と「おもふ」との組の「おもふ」の原字は「念」であるが次の一首の「おもひ忘る」の原字は「思」である。

●滝の上の三船の山は恐れど思ひ忘るる時も日もなし (⑬九一四)

「忘れて念ふ」と「思ひ忘る」とは表現が異なるのだから当然ながら、原文の文字も異なり、既に見てきたように意味が全く違うのである。尚、次項でみるように、『萬葉集』の作品に現れる「おもふ」の原文は「念」が「思」の三倍近く多い。

## 七. 「おもふ」と「いふ」と

「表現」は全て如何なる種類のどのような分野、領域におけるものでも、その「表現」者の何らかの「思い」が形

象化された成果である。詩歌が作者の「思い」の表明であるのは当然だが、通常は「思う」「思う」と言わずに思いを述べるものであろう。しかし必要に応じて作中に「思う」なる語彙を用いても別に差支えはあるまい。『萬葉集』にも「おもふ」は、その名詞「おもひ」及び動詞の「おもふ」が全ての活用形も含めて様々に使われている。

「おもふ」が最初に現れるのは、「軍の王」が山を見て作った次の長歌である(以下、該当箇所をゴチック体にする)

●霞立つ長き春日の：ますらをと念へる我も：旅にしあれば思ひ遣るたづきを知らに：焼く塩の念ひそ燃ゆる吾が下情 (⑭一五)

一首全二十九句の中に、「念」と「思」の両方の表記が前者二回、後者一回現れる。

これを皮切りに「念」は、当時五十二歳の聖武天皇作、「外よそのみに見ればありしを今日見ては年に忘れず念ほえむかも」(⑮四二六九)まで総計五五一回、「思」は大膳大夫道祖王の作、「新しき年の初めに思ふどちい群れて居れば嬉しくもあるか」(⑯四二八四)まで合計一九六回、それぞれ集中に使われ、「念」は「思」の二、八一倍強になる。他に「憶」が五回、「想」が三回現れる。この両者は少

数なので例示しよう。

● かけまくも…い巻き渡ると念ふまで…嘆きもいまだ過ぎぬに憶ひもいまだ尽きねば…万代と念ほしめして…

(②一九九) この、高市皇子を悼んだ柿本人麻呂の一四九句から成る集中最長の長歌に、「憶ひ」が「嘆き」と対で、使われ、動詞は二度とも「念」が用いられる。

● 娘子らが袖振留山の瑞垣の久しき時ゆ憶ひき吾は(④五〇二) 柿本人麻呂作

● あぢさはふ妹が目離れて…隅も置かず憶ひそ吾が来る旅の日長み(⑥九四二) 山部赤人作

● ねもころに憶ふ吾妹を人言の繁きによりて淀むころかも(⑫三二〇九) 問答歌の一

● さにつらふ君がみ言と玉梓の使ひも来ねば憶ひ病む吾が身ひとつそ…(⑬三八一一) 夫君に恋ふる歌

「憶」も名詞、動詞両方に使われる。

● 吾がやどに生ふる土針心ゆも想はぬ人の衣に摺らゆな

(⑦一三三八) 草に寄する歌の一

● 想はぬを想ふと言はば真鳥住む雲梯の社の神し知らさ

む(⑫三二〇〇) 神祇に寄せる恋の歌

「想」はこの二首に三回のみ用いられる。尚、後者の上二句は次の、「念はぬを思ふと言はば大野なる三笠の社の神し知らさむ」(④五六二)と「念はぬを思ふと言はば天地の神も知らさむ邑礼左変「結句定訓なし」」(④六五五)のやはり神に関する作品にも現れている。

● 相見ては月も経なくに恋ふと言はばをそろと吾を於毛保寒蟲(④六五四) 「この作品、字音仮名表記方式と表意表音文字表記方式との混交」

に初めて出てきて以来、巻第二十の中臣清麻呂作の

● 愛しと我が思ふ君は「阿我毛布伎美波」いや日異に来ませ我が背子絶ゆる日なしに(⑳四五〇四)

までに二〇七回使われる。

以上、『萬葉集』の作品に現れる「おもふ」は、筆者の手作業に見落しがなければ総数九六二回である。各巻ごとにどのようなになっているか、表にしておこう。まず、字音仮名表記方式のものは一括して「おもふ」として、後にそれを詳しく表にしよう。

各巻の 歌数	計	おもふ	想	憶	思	念	原字	巻
84	14				2	12		I
150	46			1	7	38		II
249	44				15	29		III
309	111	1		1	18	91		IV
114	21	18			3			V
161	31	1		1	5	24		VI
350	46		1		11	34		VII
246	35				5	30		VIII
148	20				8	12		IX
539	63	1			16	46		X
490	137	1			34	102		XI
380	100		2	1	21	76		XII
127	60				39	21		XIII
230	30	30						XIV
208	55	55						XV
104	15	1		1	6	7		XVI
142	48	41			1	6		XVII
107	23	23						XVIII
154	33	5			5	23		XIX
224	30	30						XX
4516	962	207	3	5	196	551		計

「おもふ」を表す漢字については、「念」は「うちに深く  
思いこむ意」、「思」は「思惟すること」、「憶」は「後にな  
って思い出すこと」、「想」は「相すがたによって思う、それを  
想像することをいう」（白川静『字通』P・一七〇三）。

字音仮名表記方式の「おもふ」の原字を表に整頓する。  
語幹の部分を挙げる。「お」と「も」の数の差は「おもふ」  
を「もふ」と表現するものが、五四回あるという意味。

計	も				お		原字	巻
	(米)	忘	母	毛	計	意		
1				1	1		1	IV
18		1	14	3	14	7	7	V
1			1					VI
1			1					X
1			1		1		1	XI
30			7	23	14		14	XIV
55			5	50	39		39	XV
1			1		1		1	XVI
41			16	25	37	1	36	XVII
23			10	13	22	1	21	XVIII
5			2	3	4		4	XIX
30	1		5	24	20		20	XX
207	1	1	63	142	153	9	144	計

表記に使用される文字の基本の意味を心に置いて作品の  
味読・解釈・鑑賞を行いたいという筆者自身の希いと、何  
か未知の事柄の発見と判断の手掛りになるのではないかと  
いうささやかな希いが、前稿や本稿のような単純な、調査  
ともいえない調べを筆者にさせ、無くもがなの表を作らせ

るのであろう。

「おもふ」の「お」に「意」を用いている例は、⑤八〇二、八〇五、八二〇、八四五、八八六(二回)、九〇三/⑩三九〇五/⑩四〇七五、の八回。「も」に「忘」を用いる唯一例は⑤八六六。(米)は「も」を「め」と訛っている例で⑩四三三三。

単独の「おもふ」は「念」が断然多かったが、連語で一語になるものは「思」である。例えば「思ひ遣る」は①5/④七〇七/⑨一七九二/⑫二八九二/⑬三三六一、(但し⑫二九四一「念八流」/⑰四〇〇八「於毛比夜流」)。「思ひ纏る」は、⑬三三四八。「思ひ憑む」は、②一六七、二〇七/⑩二〇八九/⑬三二五一、三二八一、三二八八、三三〇二(特)、三三二四、三三四四、(但し⑤九〇四「於毛比多能無」)。

最後に、一首中に「念」と「思」の同居する作品を先刻既に見た④五六一、六五五、⑪二四〇四以外に若干挙げる。

「片念ひに思ひや行かむ」(④五三六)、「思ひつつ千度念へど」(④五四三)、「相念はぬ人を思ふは」(④六〇八)、「吾が念ふ心遂げじと思はめ」(⑦一三八二)、「思ひ遣るたどきを知らに吾が念ふ情」(⑨一七九二)、「天の川」思ひつつ逢へらく念へば(⑩二〇七四)、「思ひ出

づる時は消ぬべく念ほゆ」(⑩三三四一)、「念はぬに至らば眉引き思ほゆるかも」(⑪二五四六)、「愛しと思へりけらし紐の解くらく念へば」(⑪二五五八)、「根深くも思ほゆるかも吾が念ひ妻は」(⑪二七六一)。

一首中に三回出る「おもふ」が三回共に「思」は、⑬三二七二、三三三四、三三三四。三回共「念」は⑬三三〇九。

類似歌の同じ表現なのに使い分けてあるもの。③二四二「念」、③二四四「思」/⑪二七六四「念」、⑪二七六五「思」。一首三七句の長歌で三回使われる「おもふ」が「念」「於毛比」「思」と使い分けられているもの⑩四一五四「この作品では三回現れる「こころ」も「心」「情」「許己呂」と使い分ける」。

一首六一句の長歌⑦三九六九には、六回現れる「おもふ」は、「思ひ出」「念ひ出」「於母布そら」「於母保しき」「念ひなげかひ」「於毛敷どち」と使い分けられ、二度出てくる「こころ」は「許己呂」と「心」であり、「こひ」の表記は「孤悲」。

\*

「おもふ」「おもひ」に深い愛情が絡まってくると「こひ」「こひ」になる。『萬葉集』全作中には、名詞、形容詞、



動詞（その活用形を含めて）など様々な形で「こひ」が出てくる。表記として「恋」が最も多い（六八五回）のは当然であろうが、「孤悲」が三〇回使用されているのはさすがで、「恋」とは「孤悲」なのだという萬葉びとの認識には感服せざるを得ない。確かに「恋」とは、どれ程「幸せな」「喜び」の恋であろうと、そうであればある程、孤独な、孤りの悲しみが根底に常に揺曳してやまないものなのだから。

「孤悲」なる表記がみられる例を全て作品番号で挙げておこう。①六七／②一〇二／③三二五／④五六〇／⑤一七七八／⑥一九二二／⑦三五〇五／⑧三六〇八、三六五二、三六九〇／⑨三八九一、三九二九、三九三一、三九三五、三九三六、三九五七、三九六九、三九七七、三九七八、三九八〇、三九八七、三九九五、四〇〇六、四〇〇八、四〇一一（二回）、四〇一五、四〇一九／⑩四〇三三、四〇八三。巻第十七には「こひ」に最も多くの種類の表記が見られるが、三四回現れる「こひ」のうち一八回が「孤悲」である。

尚、「眷」は、巻曲（曲がりくねる）「のような姿勢で、心にかけて顧視すること」（字通）で、「…嘆けどもせむすべ知らに眷ふれども」②二二三「底本の「恋」が改訂され

たもの（小）」、「…ありかつましじ吾が眷ふらくは」②二四八一、「里遠み眷ひうらぶれぬ…」②二五〇一、の三回使われる。

どの表記がどの巻に現れているかを一覽表にしておこう。  
\*表に挙げてないが、実はもう一回、「我妹子と二人我が見しうち寄する駿河の嶺らは恋しくめ」「苦不志久米」あるか  
②四三四五、の駿河訛りの表記があるので、「こひ」の実数は八二七回である。尚、②二五二一の結句は「恋由眼」ではなく「尔心由眼」を採ることにして数に入れていない。

原字		卷	
恋	6	I	
	26	II	
	17	III	
	88	IV	
孤悲		V	
	11	VI	
	25	VII	
	31	VIII	
	21	IX	
	104	X	
	160	XI	
	131	XII	
	41	XIII	
	1	XIV	
	3	XV	
	8	XVI	
	18	XVII	
	2	XVIII	
	10	XIX	
	2	XX	
	685	計	
眷			
	1		
古飛	2		
	2		
古非			
	13		
	18		
故非			
	11		
	5		
	7		
	2		
	6		
	4		
	17		
	51		
	3		
	2		
	2		
	30		

計	故非	呉悲	呉非	胡悲	胡非	故保	古保	故敷	古敷	孤布	故布	古布	古比	故悲
7														
28														
18														
89														
7					1	1	1							
11														
25														
31														
22														
105														
162														
131														
41														
20											3	3		
41				1							3	3		1
8														
35	1	1	1		1				1	1	2			
13								2			1			
13												1		
19*												2	5	
826	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1	9	9	5	1

「おもふ」と「こふ」の合体した表現に最後に注目しておきたい。

「吾は孤悲念ふを」②一〇二、「念ひ恋ふらむ」②二一七、「恋ひまく思へば」⑦一二一七、「念ひ乱れて恋ふれども」⑫二九六九、「恋しく思ひかねつも」⑫三〇九六、「恋しき念へば」⑫三二四〇、「恋ふらく思へば」⑬三三三〇二、「於母比孤悲息づきあまり」⑰四〇一一、「思ひ恋ひ息づき居るに」⑱四二二四、「恋しけ思はも」〔古布志気毛波母〕⑳四四一九。

注

(1) 本誌前号拙稿「成城文藝」第二三三号の注(1)、(2)を乞参照。

(2) 右記拙稿で、乗算の九九での数を表記しているものに触れた(注(3)とその本文)が、中国古典にみられる先例には、例えば次のようなものがある。

①南朝宋の鮑照(四一六―六六)の詩「翫月城西門廡中」の中の「三五二八時、千里與君同」。この「三五」は十五日、「二八」は十六日、それぞれ小の月、大の月の満月の時を意味する。

②前漢の揚雄(前五三―後一八)作『太玄経』の「陳其九九、以為数生」、「北史」の牛弘伝にみえる「黄鐘九九實也」、及び、後漢の張衡(七八―一三九)の

「東京賦」の中の「属車九九、乘軒並轂」は、いずれも「九九」が「八十一」を表している。

③「東京賦」には、「歴載三六、偷安天位」、「授鉞四七、共工是除」のように「三六」で「十八」を、「四七」で「二十八」を表すなどの例もあり、探せばまだ同様の例は出てくるだろう。尚、<sup>⑬</sup>三二九八の表記にもあった「二」―「四」〔死〕のように我が国では「四」はその音で「死」を想起させかねないところから、ホテルの部屋番号など「四」を避けたりするが、中国では「四」と「死」は発音が違うのでそのような連想は起こり得ない。

以上全て、各々の詳しいテキストのコピー共々、向嶋成美筑波大学名誉教授の御教示に与った。

(3) 拙稿「相反する二方向による発見―〈オクシモロン〉への頌詞」*American Literature Tsukuba*, No.6, pp.59-65, 1993. 3. を乞参照。